



さくさくの
ふつくらとした
カキフライ

greentea0117

さくさくのふっくらとしたカキフライ

さくさくのふっくらとしたカキフライ

カキフライが食べたい。ふっくらとしたカキフライ。ジューシーなカキフライ。ああ食べたい。

実際のところ、油で揚げる料理なんてここ何年もしていない。食べに行くのも面倒くさい。目の前にきれいに盛り付けられたカキフライが出現してくれたらいいのに。

カキフライどころか、最近料理もろくにしていない。夫はそのことについて別に何も言わない。勝手にラーメンをすすったり、ありあわせのものを食べたりしている。

「最近、どうも意欲が湧かない」

私が言うと、

「ふうん、そういうこともあるだろう。働く方が性に合ってるんじゃないか？」

と言われた。夫はおおらかで、自由だ。私が何をしてもしなくても、文句を言ったことがない。私にはもったいないと思う。でもなんだか意欲がわかない。ああカキフライが食べたい。

家でもんもんとしていることに飽き、外に出てみた。でも誰かがカキフライをいきなり持って来てプレゼントしてくれるなんてことはなかった。当たり前なんだけど。でも私は、寒い公園に座ってずっと待っていた。

収穫は無く家へ帰ると、夫はまだ帰っていなくて真っ暗だった。湯呑にワインを入れて、テレビを見ていた。夫が帰ってきて、私を見てぎょっとした。

「なんだ、電気もつけないで」

突然まぶしくなって、

「お願い、電気消して！」

私は叫んだ。

「なんだよおい、どうした？」

夫が言った。再び暗くなった部屋のソファに身を沈めながら、

「カキフライが食べたい」

私は言った。

「カキフライ？」

私は夫と、終わりが来たことを悟った。